◆図書館スタッフのオススメ本を紹介します

仕事に関するさまざまな相談に著者が答えるという構成。経済情報に特化したソーシャルニュースメディアNewsPicksで連載された記事がもとになっている。

好きなようにしてください：たった一つの「仕事」の原則
楠木建 著
ダイヤモンド社

159 / KU ［本館］

歴史を楽しんで読んでほしいという意図で、読者に語りかけるような文章で読みやすい。第二次世界大戦後に書かれた「50年後のあとがき」（下巻）には、歴史や戦争に対する著者の率直な思いが込められている。

若い読者のための世界史：原始から現代まで 上・下
エルンスト・H・ゴンブリッチ 著/中山典夫 訳
中央公論新社

209 / GO / 1, 2 ［本館］

法について学んだ知識を，「よい」文章として表現するにはどうすればよいか。法律の文章ならではの特性や,基礎となる日本語の文章作法を丁寧に解説。

法を学ぶ人のための文章作法
井田良, 佐渡島紗織, 山野目章夫 著
有斐閣

320.7 / ID ［分館］

東京地裁、大阪地裁などの裁判官を任官してきた著者が送る「裁判所ってこんなところ」。公平・公正・正義とは？事件を裁く裁判官の素顔とは？

裁判所ってどんなところ?：司法の仕組みがわかる本
森炎 著
筑摩書房

327.1 / MO ［分館］

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クエスチョニングといったセクシャルマイノリティについてまとめられた導入的な本。当事者の体験談のほか、学校現場での対応についても述べられている。

LGBTQを知っていますか?："みんなと違う"は"ヘン"じゃない
日高庸晴 監著;星野慎二ほか 著
少年写真新聞社

367.9 / HO ［本館］

非正規保育者が増えている公立保育園の実態を自治体調査とアンケートによって明らかにし、今日の保育者しての働き方、保育の問題について考えた一冊。

私たち非正規保育者です：東京の公立保育園非正規職員調査から見えてきたもの
非正規保育労働者実態調査委員会 編著
かもがわ出版

Y4 / HI ［本館］

ジブリ映画『もののけ姫』や『千と千尋の神隠し』などを海外に広めた著者による回想記。日本と諸外国の交渉術の違いや、仕事の仕方、考え方の違いなども書かれている。

吾輩はガイジンである。：ジブリを世界に売った男
スティーブン・アルパート 著/桜内篤子 訳
岩波書店

778.77 / AL ［本館］

芥川賞作家となった著者が受賞作『火花』の制作秘話に加え、少年期以降の文学遍歴とともに「文学とは何か」「なぜ本を読むのか」について語った新書。

夜を乗り越える
又吉直樹 著
小学館

910.26 / 新 ［本館］

ささやき

館長の粕谷先生が３月末で退任されました。記録的な豪雨により被害を受けた際には、図書館の復旧のために、多大なるご尽力を賜りました。２年間ありがとうございました。新館長の先生には図書館だよりにも是非ご登場いただきたいですね。

平成29年４月１日　発行
編　集　図書館だより編集委員会
発　行　白鷗大学総合図書館
〒323-8585　栃木県小山市大行寺1117
ホームページ　http://hakuoh.jp/library/index.html
印　刷　㈱尚文堂印刷所

図書館だより
HAKUOH
白　鷗　大　学
第49号 2017. 4

私と図書

元教育学部教授
加　藤　澤　男

今、70歳にして思うに、幼稚園時代のキンダーブックに始まり、小学館の学年に応じた雑誌など町の本屋さんが毎月家に配達してくれていました。と言うより、実は親が購入してくれていたのですが、その発行日を毎月楽しみにしていたことを思えば、わたしは決して本が嫌いだったわけではありません。しかし、子供の頃の図書館となるとほとんど記憶に残っていないのです。義務教育時代、敗戦後10年前後のことですが、学校施設がいくら不十分であったにせよ、図書室はあったように思います。

私が自ら図書館という場所に足を運んだ記憶の最初は高校に入った頃からかと思います。すでに高校へ進学すること自体が勉強と言うより体操競技をやりたかったからであり、学校の授業が終わるやいなや体操の練習にとんでいくような生活をしていました。中間考査･期末考査が近づくと体操の練習を手短に切り上げ、勉強をしなければなりません。そんな頃に体操部の同級生に教えてもらったのが新潟市の図書館だったのです。静かな閲覧室で試験勉強ができたのです。

しかし、図書館ということの理解は静かな空間程度で、そのシステム、利用価値などはまったく知りませんでした。大学に進んで調べ物が必須となった頃、とりわけ卒業論文が目の前に立ちふさがった頃、やっと図書館はすごいシステムである事を知った次第です。

本格的に書物を読んだり調べたりと言うことが始まったのは大学に進んでからのことですが、運動の学問は大半が物理・力学、生理学、医学、心理学などなどで、科学論的には各々の研究フィールドとそれに対する追究方法が確定された世界であり、私がのめりこんでいる「人間の行うスポーツという運動」に真正面から向き合う科学にはなかなか出会うことが出来ませんでした。1960年代に出版された『Bewegungslehre/Kurt Meinel（運動学）』を知ったのは大学時代のことであり、恩師が教えてくれたことです。ちなみにこの書は1981年に恩師が日本語版完訳を出版されました。この頃を境に原書にも手を伸ばすようになった次第です。

この本の購読を通じて人間の運動を考えるようになり、元をたどっていくと人を抜きにして語れないゲーテあたりの考え方、いや、極端に言えば、地球上に人間が登場した時点からの集積である人

の運動の考え方が理解できるようになってきました。人の運動は現今の科学的証明で分かったとしても、機械や物の運動とは異なります。人の運動は現実に行為･行動化して完結するのですが、運動が外面化するまでの人の内面を抜きにした単純な「分かった」では解決できないのです。人を丸ごと認めない限り運動に立ち向かうことは出来ません。それぞれの人の運動体験に根ざしている運動を物的な追究法で解決しようとするのは端から無理というものなのです。教育学部の学生は人と接する世界に旅立つわけですから、人の運動を間違えてとらえたら大変なことになります。

図書館とは縁遠い私ですが、風変わりな運動学を講義してあっという間に７年が過ぎ、退職の年がまいりました。退職後は時間にとらわれず、人の運動を探求して余生を送りたいと思っております。そうなると､やはり先人の知恵は重要であり、世界中の知恵を丸ごと抱えている図書館というシステムはますます重要なものになることでしょう。

図書館はこころのオアシス

法学部教授
河　野　泰　義

東キャンパスの図書館に立ち寄ると、何とも静かで清潔な広々とした空間が拡がっています。奥の視聴覚室では映画も観られるようです。今を去る〇十年、学校の図書館や読書に纏わる思い出を手繰り寄せてみます。小学校の「図書」の時間は図鑑やＳＦばかり。中学で国語の先生が「あんたたちどうせ読んだことないでしょ」と毎回10冊位の文学作品などの本の名前を書き出しました。『変身』、『土』、『阿Ｑ正伝』、『破戒』、『死に至る病』etc。先生の気迫に押されて手に取り睡眠導入剤に。それでも後年かけがえのない愛読書になったものもあります。高校の図書館は流石に沢山の本が並び、借りると大抵寝不足気味。通学中に『カラマゾフ』か何かを読み耽って遅刻しました。文学好きの友人が高い棚に梯子でよじ登り、埃を被った個人全集本の日記や手紙まで丹念に読んでいました。大学法学部の読書室は司法試験等受験生の住処で近寄れませんでした。汚いラウンジでも雀荘でもなく、天井が高く、開放的な大学図書館にやっと居場所を見つけました。学生時代、試験間近に関係ない本を夜更けまで読んでしまい困っておりました。追い込まれると「頑張る」のでなく､「逃避行動」に出てしまう癖は今も完治していないようです。それに、本筋と関係ない細部が気になり、動物や景色、無駄口や「ぼやき」が延々と続くような本に不思議と安心したりします。結局、人生のお手本のような本より､「何言いたいのかは自分で捕まえな」みたいな本に惹かれるようです。裁判所で毎日記録読みに明け暮れていたころ、部長が「たまには薫り高い文学でも読みたいなぁ。」とぼそり。事件の記録に薫りも味もないのは仕方ありませんが、長いものを読む時間の持てる貴重な学生時代を懐かしく感じたもので

本学蔵書

す。話は変わって、図書館が縁結びになる映画として、ご存知ジブリの『耳をすませば』があります（お爺さんの「鍋焼きうどん」気になりますね…）。情報洪水や繋がりの煩わしさに疲れを感じたら、図書館を住処にしてゆったり構えてみては如何でしょう。

図書館ニュース

◆下野新聞のデータベースが利用可能に

水害にあった縮刷版にかわるものとして「日経テレコン21」の中で「下野新聞」記事が検索できるようになりました。収録期間は、2001年１月以降です。

◆分館５階法科大学院エリア席が学部生も利用可能に（一部を除く）

学部生の閲覧席が44席増加しました。

◆本館メディアコーナーが再開

他の人が視聴中かどうかOPACで確認できます。状況欄に「利用中」と表示されます。